

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 吉野 裕介 研究員（特別研究）

提出年月日 平成 26 年 3 月 26 日

【本ユニットにおける研究テーマ】

和文 東アジア諸国におけるハイエクを中心とした新自由主義の受容と展開

英文 The Acceptance and diffusion of Neo-liberalism in East Asian Countries

【研究のねらいと目的】（600 字程度）

これまでに取り組んできた**戦後アジア諸国におけるハイエク思想の受容**について研究を進める。

本研究の目的は、ハイエク思想の流入から、どのようにアジアの自由主義経済思想が発展したかについて考察することにある。自由主義思想は欧米で強い影響力を持った思想であると同時に、戦後のアジアにも流入した。こうした広いテーマを持つ本研究は、同時に経済学だけでなく、**自由主義もしくは新自由主義**、引いては**ついついなる概念の福祉国家論**などに関心のある**社会学者や歴史学者との議論にも共通の土台**となりうると考える。成果は国際・国内学会で報告し英語で公表するだけでなく、異分野の研究者とも議論を深められるよう各方面の研究会でも成果を交換する。

研究内容は、まず 1.日本や台湾におけるハイエクが受容された過程の、**歴史的研究**である。具体的には、翻訳の問題を取り上げ、各国でハイエクの著作が、どの分野の学者によって訳され、どのような人たちに読まれ、解釈されていったのかについて検討する。さらに、2.これまで行ってきた日本におけるハイエク研究の意義だけでなく、**東アジア全体から見た自由主義経済思想の意義を、共同研究により**解明する。戦後の東アジアにとって、ハイエク受容ひいては新自由主義の経済思想の流入や伝播が、各国でどのような意味を持っていたかを共同研究する。

【研究業績】学会報告・論文など

単著 吉野裕介『ハイエクの経済思想-自由な社会の未来像』, 勁草書房, 2014 年 3 月。

共著 吉野裕介「第 5 章 ハイエクの心理学と進化論—『感覚秩序』と『文化的進化』」, 桂木隆夫編『ハイエクを読む』, ナカニシヤ出版, pp.115-141, 2014 年 3 月。

共著 吉野裕介「第 6 章 アメリカの保守とリベラル：対立軸の起源」, 杉田米行編『アメリカを知るための 18 章』, 大学教育出版, pp.58-66, 2013 年 10 月。

論文（査読付き） 吉野裕介「アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』：思想の受容・普及プロセスからのアプローチ」, 『経済学史研究』, 経済学史学会, Vol.55, No.1, pp.36-52, 2013 年 7 月。

学会報告

吉野裕介「ハイエクにみる新自由主義と福祉国家の理念—ケインズ主義批判を手がかりに」,  
ケインズ学会第 3 回年次大会, 専修大学, 2013 年 12 月。

吉野裕介「ハイエクにおける『新自由主義』と『福祉国家』」

第 77 回経済学史学会大会, 関西大学, 2013 年 5 月。

### 【成果の概要】（800字程度）

本年度は KUASU 発足一年目であったが、昨年までの GCOE 時代を合わせて三年間にわたる京都大学でのポスドクとしての研究活動の、集大成と言える成果が得られた。

まず、2013年7月には、これまで何度かトライしたもののリジェクトされてきた国内の学会誌にようやく掲載された。この成果は、筆者の研究アプローチ-思想の普及や受容-を磨き上げるうえできわめて重要な論文となった。

次に、2014年3月に、政治思想や法哲学など他分野も含めた研究者と協働し、ハイエクに関する研究書を作り上げるプロジェクトに関わらせてもらい、一章を寄稿した。こうした経験は、専門である経済思想分野との議論から得られる示唆とはまた異なり、筆者の研究を豊穡なものにすることを助けた。

最後に、2014年3月には、2007年に本学に提出した博士論文を大幅に加筆修正し、単著として刊行することができた。この単著は、自身のはじめての著作であるだけでなく、「自由な社会の未来像」を構想するという、歴史研究から現代社会論へと発展させる広い射程をもった考察を試みることができた。

研究に広いテーマを持たせることで、経済学だけでなく、**（新）自由主義**、ひいては対となる概念の**福祉国家論**などに関心のある**社会学者や歴史学者、政治学者との議論にも、共通となる土台を提供できる**と予想される。将来的に成果は国際・国内学会で報告し英語で公表するだけでなく、他国の異分野の研究者とも議論を深められるよう、各方面の学会、研究会でも成果を交換することを見据えている。

筆者がこうした成果を得られたのは、単に京都大学のポスドク、研究員というポジションによって可能になったのではなく、GCOEやKUASU自体をプラットフォームとして、多様な研究者が集まり、鷹揚に取り組める空間があったおかげである。短期的な成果だけでなく、大きく長期的な研究に取り組ませる余裕があった。したがって、単年度だけの成果でなく、長い目で評価しなければ、研究者養成や、国際交流など、当初の目的は評価し得ないと考える。今後は、研究成果だけでなく、海外渡航、資料収集、ネットワーク構築などの萌芽的な取り組みをどう好意的に評価できるかが、組織全体の原動力の鍵となるように思う。

### 【通信欄】